

県民生活労働政策編

青森県労働運動史

オ一卷・オ二巻

斎藤康司

発刊の目的と完成までの経過

第一巻及び第二巻の序文やあとがきによつて発刊の目的と完成までの経過を採れば、次のとおりである。

管内知事はその序文において「戦前の社会運動は、当時の社会制度下にあつて常に圧迫を加えられ、その道はまことに險阻を極めた。……にもかかわらず、かすかすの成果と示唆を残して戦後に引きつがれた。……その後労働問題は、時流と共にいくたの変ぼうをかさねながら、一路正常化の目標を失わないで今日に至つたといふ認識を明らかにし、編さんの目的として「新しい労働

運動のあり方を採るための根拠として、また散失し湮没している関係資料を、できるだけばとめて後世に伝へたい意図」であるとしている。

この目的を達成するための編さんの基本方針は、あとがきによれば、①青森県史の一環として労働（戦前は、労働、農民、民権、護憲）運動の推移をまとめ、県民に対してこれからの運動の正しい認識と理解を求める。②労働運動とそれに関連した正史的事実を可能な限り収集し、それを正しく整理して後世に伝える。そのことによつて本県の労働運動が、日本の労働運動の流れのなかにどのように意義づけられたかを採る。③明治から第二次世界大戦終了までを一巻にまとめ、本県の特殊性を主とした独自のスタイルで表現する、の三点であつたようである。独自のスタイルというのは、別に記すところによれば原資料や聞き書きを集めた純資料編にすること、ことで、資料収集ならびに編さんの一切を県嘱託米田親生氏が担当して、恐らくは二千年くらいで完成する計画であつたと読める。

ところが実際には昭和三十八年四月に着手して第二巻が刊行されて完了したのは四十六年二月であるからと年十ヶ月の長い歳月を費やしたことになる。この間の経過を年表ふうに示せば次のとおりである。

38年4月 事業に着手。

39年3月 仮年表作成。

40年1月 編さん審議会設置。委員長小野久三、委員
山本省一、山口寿、渡辺惣助、相沢文蔵、米田親生
の各氏のほか県側二名。

40年4月 「明治大正編編さん資料」発行

40年8月15日 座談会「明治・大正期における本県労働運動を語る」開催。司会竹内知事、出席者渋谷盛蔵、大沢久明、岩淵謙二郎、柴田久次郎、堀江秀蔵、本多治治の各氏。

この時期に審議会が明治・大正編一卷、昭和戦前編一卷とすることを決定。

42年11月 小野久三委員に大正編の、相沢文蔵委員に明治編の執筆を委嘱。

43年10月 西委員原稿提出。

43年12月10日 第一巻編集完了。

44年3月 第一巻刊行。

46年2月 第二巻刊行。

この経過を見て容易に想像できることは、編さん目的が大きいものであったわりに、事業計画が安易であつたといふことである。途中で有識者の智慧を借りる必要を感して審議会を設けるが、最終的にはその審議委員に執筆をゆだねるという結果になっている。この間の時間的・費力的な口実は相当なものであつたに違いない。

なせ私がこんなことに長々と字数を費やすのかということ、役所がやる歴史編さん事業はえてしてこういうことになりがちだということを一度は指摘しておきたかつたからである。役人は自分の在任中に片をつけたい。財政当局もできるだけ金をかけないですますよう担当課課に圧力をかける。共に歴史編さん事業のなんたるかを知らないものどうしであるから一人の専任職員を置いて、三年でやめてしまおうということになるのである。しかし有識者はそれですますわけにいかない。担当課課を叱つたり励ましたりして時間をのはし予算を獲得させる。そろしてようやく世に問うにたる仕事ができあがる。本書はまさにそうしてできあがつたものであるといつていいだろう。

構成

二巻五部三十六章からなる構成の全部を紹介するわけにはいかないのです、私自身興味をもつて読んだ章節だけを次に列挙する。

第一巻

第一部 明治編

第一章 明治前期における県内社会状況

第二部 概観

第三節 南部における農民騒動

第四節 弘前士族の動搖

第八節 無神経事件の一側面

第二章 明治後期の社会主義と労働運動

第二節 日本鉄道ストライキ

第四節 片山潜と本県

第五節 週刊「平民新聞」と本県人

第七節 県内各地の社会主義研究団体

3 弘前における社会主義研究団体（笹森修

一のうごきと「バザロフ会」）

第一〇節 竹内兼ひとその周辺

第十一節 原德基とその周辺

第十三節 大正事件のうけとめ方

第二部 大正編

第三章 米騒動の起こらなかった青森県

第一〇章 大正時代の農業と農民運動

第四節 本県の農民運動

第十一章 青年と政治

第十三章 大正の文学と本県の文学運動

第二卷

第一部 昭和初期における社会運動と労働運動

第三章 無産政党の動向

第六章 組合活動と労働争議

第二節 青森合同労働組合の役割と活動

第七章 農民運動と小作争議

第二部 満洲事変前後における社会運動と労働運動

第六章 県内における電灯争議の概況

第七節 フロレタリヤ文芸活動

第二節 昭和戦前の本県文字音と文字雑誌

第三節 「座標」と「東北文学」

第三部 戦時下における社会運動と労働運動

第二章 戦時下の農村問題と社会運動

第一節 産業組合青年連盟と日本革新農村協議会

第三節 二・二六事件と青森県の右翼

以上は私の召込に偏しているかと知れないが、本書に
実には範外野にわたって記述されていることの表示に
はなるであらう。

相沢、小野の両執筆者は、その時代と全国の動きを先
ず明らかにし、本県がそれとどのように相かかわったか
を裏証し、そこに見られる落着かないしは後進性、あるい
は又特殊性の原因を追求するという構成をとっている。

内容

本書の編さんに紆余曲折があったことは既に見たとこ
ろであるが、できあがった内容は十分にその目的を達し
ているといつてよいようである。それは米田氏が実に丹
念に史料の収集につとめ、又実に多くの証人を採訪
して要領のよい聞き書きををつくっておいたことと、相沢、
小野という当代第一級の執筆者をえたこととの結合の結

果である。

例へば明治期の社会主義運動に相当に大きい役割を果たした竹内兼七、原子基という二人の梟人の事績は、なお不明の部分を残してはいるものの、本書によって発掘されたといつていいであらうし、笹森儀助の次男にして東奥義塾の卒業生である修一がキリスト教から社会主義に入つていったという事実の究明は、これまで評価されてきた東奥義塾の存在意義に更に新たな価値をつけ加える性質のものだといえる。

しかしそれらの発掘なり新しい評価なりをするに當り、執筆者たちが自認したことは、客観的な立場を失わないうということであつた。このことを相沢氏は序説の中でこういつてゐるのである。

「当面この労働運動史の記述にあつては、勞使双方いかなる立場にもたつものではないことは当然のことながら明確にしておかねばならない。これをかりに中立的立場と表現するにしても、さらにこの点をきつめていくと、嚴密な意味で中立的立場などとはあり得ないともいえる。われわれ人間それぞれ自体のもつ人間的存在においては無意識のうちにも何がしかの主観的立場なり態度なりは多少かれ少なかれのきまじわざるを得ないであらう。しかし、つとめて客観的、中立的立場にたつて公正に正史的事象を追求するために努力することとは可能であり、またこのような立場はあくまで堅貞

されなければならぬ。また使用される史料は具体的な事象の一面面を伝えるに過ぎない場合も多く、しかもそれはしばしば個人的、主観的要素の強いのが普通である。それらはあくまで史学研究の方法論によつて批判的立場において取捨選択がなされ、嚴密に処理されねばならない。また出来るだけ原史料主義にたつて、第二次史料や文獻資料の使用はやむを得ざる場合を除いてさけることにしたい。」

感想

二巻で一五〇〇頁という活翰な本である。しかし、この紹介のため通読して少しも苦通を感じなかつた。繰り返すが、それは二人の執筆者が日本近代史に通暁して、その深い学識をもつて本泉關係のほう大な史料を自由につかいこなした、その奥行き之の深さと裏証に見ゆる手際のよさのためである。相沢氏には先の引用でも明らかのようにオーソドックスな史學者の姿勢と重厚な文體があり、小野氏には驚くべき博覧強記があらわれているような華麗な文體がある。私は正史も又達意の文章を書けるなればならぬと信じてゐるのであるが、両氏とも十分にそれをなし遂げてゐるのである。

次に感じることは、この編さん事業がもう十年遅れていたらどういふことになつたろうということである。米田氏が集めた聞き書きの相手——つまり生證人の最も早

生まれは明治十二年である。恐らく今日現在その証人は存命しないであろう。四十年に実施した座談会の出席者七人のうち岩淵、本多の両氏は今は故人で、岩淵氏の如きは第一巻の完成さえ見ることなく他界した。いかなる契機がこの事業を起させたかは必ずしも分明でないが、良い時期に行われて、多くの証言を記録できたことも本書の価値を高めることになっている。

本県関係のあらゆる証史編さん事業が先ず依拠する史料は「東奥日報」である。私は他県について知るところは全くないが、その創刊の古さと継続して絶えることのなかった点と全県紙的性格——南部地方については弱い——によって史料たる価値をもっているのだと考える。しかし、今日現在の新聞読者として、新聞が正しい証史の証言者であるといえるかという点に甚だ疑問である。ここに、生き証人の証言が、あらゆる分野にわたって引き出され記録される必要があるのであって、本書は後続するであろう諸多の編さん事業によき教訓を与えるに違いない。

最後に、いわば体制側の末端にあるといつてよい編さん主体と、反体制運動を記録するという執筆者との微妙なズレと、執筆者がそれをするようにして解決したかという点について、多少独断のきらいがあるが、ふれておきたい。相沢氏が序論で明らかにしたように労使の対立には、いわゆる中立性を守ることに努めているのだが、

執筆者たちがその思想を問われるのはそういうことではなくて、一時代をどのように観たか、日本資本主義体制というものをどのように評価したかということである。この点になるとほとんど評価が決まっているといつてよい。明治・大正よりも、昭和の方がむしろ小野氏の苦心も又そこにあったように思われる。そこで小野氏がこのたのは、徹頭徹尾、世間一般に流布している文獻史料によつてその時代を語らざるという方法である。

例えば三十三頁にわたる「昭和初期の青森県概況」の中に引用される文獻史料は、「三宅雪嶺」同時代史」、「前芝薩三、奈良本辰也」体験的昭和史」、「朝日新聞」昭和史の瞬間」等から東奥日報「青森県日記六十年史」、「青森県農地改革史」等にいたるまで、実に三十三点に及んでいる。そして最後に自ら総括して次のように書いている。

「いすれにしても一つの時代を一義的に明るいとか暗いとかきめつけるのは危険である。またすべてが上昇しているとか全面的に下降しているとかを一つの時代に規定することもできない。昭和初期に国民の多くはかつてない不況に悩んだが、いくつかの将来への発展のきざしも現われている。治安維持法とセットであるという致命的欠陥はあるものの普通選挙が行なわれたこと、日本におけるラジオ放送は大正十四年から開始されていたが、いわゆる円本時代と新聞の大企業化が昭和とともに訪れ、

収束の普及に大きく貢献したこと、県内についても弘南・南部・津軽の各鉄道が開通して経済や社会生活の地域内交通に役立ったこと、大正末年に始まった八戸の工業化のようなく動きだしたことなど国内県内ともにいくつかが着実な発展の芽をみせた。ともあれ困難な時代にどう対応しようそれを切り抜けるか、芥川の文学を敗北の文学と呼んだ宮本顯治は、それを克服すべき野蠻な情熱の必要をよびかけた。ただその野蠻な情熱の源泉は一つに承けなかった。また政党内による漸進的改革の道もあった。ただが、昭和戦前の選択は、じりじりとただ一つの方向、主の力による海外への進出という方向にすべてが集められた。その方向がなほはっきりせず、その他の試みもこれに入り混った本番への序幕が昭和初期だということになる。

小野氏がここで筆をまけているなどは毛頭考えていない。ただ、執筆者の思想と責任を重んじて、編さん者である自治体が、あたかも出版社であるかのような関係で執筆者との間に保つようになれば、今後の地方史がもっと豊かに、成果も大きくなるのではないかという提言をしようと思う。

(青森県民政労働部市政課発行非売品)